

1. ヨーロッパの移民統計に関するもの
 - a. 統計を見て、ドイツとフランス、スウェーデンやフィンランドなど、地理的には近くても外国人への対応は国によって全く異なること、それゆえにミクロとマクロの視点で歴史を見ていかなければいけないことを改めて実感
 - b. サッカーが好き・・・ヨーロッパには国の代表として黒人の選手やアジア系の選手がいるのはなぜだろうと思っていた・・・スポーツ面での移民政策が及ぼした影響を私は調べてみたい¹。
 - c. 移民の受け入れ体制を年代別に見るのは、当時の政策や社会状況を見れるので面白い、「人種主義や民族主義がどのような要因で人々のなかに広まるのか広がるのか」というテーマは面白いなと思った²。
 - d. 移民という切り口から、国を見て調べてみるのも面白い。
 - e. ドイツに外国人移民が多いという事はなんとなく知っていましたが、他のヨーロッパ諸国の詳しいデータを見たのは初めてでした。スイスの外国人の多さにはさらに驚きました³。
2. イェドバブネ事件について
 - a. ポーランド人⁴はそもそもユダヤ人を差別的に見ていたのか、ドイツのユダヤ人絶滅政策に感化されて行ったのか、疑問⁵。

¹ いいテーマの発見ですね。

² これまた、どれかの事件などに関する報道などを追跡し、文献などを捜し、期末論文にまとめることができれば、いいですね。

³ 「驚き」こそは、テーマ設定の非常に重要なきっかけ。「驚き」から、なぜ、どうしても疑問がわき、調べてみる、という風に進んで行きますと、素晴らしいです。

⁴ 「ポーランド人」を一括して取り扱っては問題ですね。ポーランド人のなかにも、さまざま考え方の人がいます。日本でヘイトスピーチをする人は、日本人のなかのごく少数の人です。「日本人はヘイトスピーチをする」といえば、問題だということはわかりますね。しかし、政治的・経済的危機がやってきたとき、そうした言説に感染しやすくなり、そうした排外主義的な民族主義の考えが広まることはあります。だから、われわれは、注意しなければならないでしょう。

現在のヨーロッパ（大量難民流入による危機など）で蔓延しつつある右翼的潮流（例えば、オーストリアの「自由党」党首が大統領選挙であわや当選というところまで支持を広げたこと、フランスの大統領選挙で極右政党の女性党首ルペン氏が、「有力」候補となると予想されていることなど）を見ながら、日本は果して、「極右的な」潮流が強まっていないかどうか、よくよく考えてみる必要があるでしょう。

⁵ 説明したと思ったのですが、まずは歴史的な前提としてのポーランド社会（キリスト教カトリック地域・・・前々回のローマ法王はポーランド出身）に形成された反ユダヤ主義の潮流があり、悲願の独立を達成した新生ポーランドではとりわけナショナリズムが強かったこと、30年代における経済危機の深刻化などの影響下、ポーランドのなかで「ユダヤ人なんかアフリカどこかに追放しろ」といった空気が強まり始めていたことなどがあります。また、東の隣国ソ連とは独立直後に領土問題で戦争もしており、ユダヤ＝ボルシェヴィキといった反感がナショナリズムと結合する状況でもありました。その状況下で、ナチス・ドイツが39年9月に攻め込んできて、現地の反ユダヤの感情を焚き付ける状況となり、それらが作用した、と。

3. ヒトラーのカリスマ性、人間性 などについて
 - a. 「深く知るのも面白そう」・・・ぜひ、前回紹介した[イアン・カーショウの本『ヒトラー』上下（白水社、2016年）](#)を読んでください。まさに、カーショウは、「ヒトラーのカリスマ性」を解明しようとして研究を積み重ねてきたことが、冒頭書かれています。読んで行けば、その意味がよくわかると思います。
 - b. 授業とはあまり関係ないですが、先日、『帰ってきたヒトラー』という本を買いました。これはフィクションでコメディイナなのですが、ヒトラーが現代にスリップしてコメディアンとして生きるという内容の本です。戦争から約 70 年も経ち、こういう内容の本も書けるようになった時代でもあるのかなと・・・⁶
4. 何故ヒトラーにとってユダヤ人＝マルクス主義だったのですか？⁷

ナチス・ドイツの反ユダヤ主義の政策は、39年から40年、さらに41年3月ごろまでは、まだ絶滅政策ではなく、ポーランド南東部の「ルブリン地区」を「居留地」として集中する構想、その後、40年にフランスを占領したときには、フランス植民地だったマダガスカル島へ「500万人のユダヤ人を送り込む」といった政策でした。さらに、ソ連攻撃計画が練りあげられる40年12月から41年春頃までは、広大なソ連を占領して、そのどこか（シベリア構想）に追放する、といった計画でした。

全ヨーロッパのドイツ支配下のユダヤ人の「絶滅」政策への移行の画期は、41年12月であり、日本の真珠湾攻撃によりドイツがアメリカに宣戦布告した後です。拙著『ホロコーストの力学』（関連[HP「ホロコーストの論理と力学」](#)）参照。

「ユダヤ人問題の最終解決」を議題とするヴァンゼー会議は、1942年1月20日です。このヴァンゼー会議の記念館の文書集を翻訳した史料集が、山根先生と清水さんの翻訳で、横浜市立大学叢書の一冊として昨年出版されました。

⁶ 今月、映画化された[「帰ってきたヒトラー」](#)が封切りになります。

⁷ これまた、大問題。マルクスは、父親がユダヤ教徒のラビ。マルクス自身は、「宗教はアヘンだ」（彼のごく初期の論説「ユダヤ人問題」参照）と喝破し、社会の苦難をなくするためには、宗教に頼るのではなく、社会自体を変えていく、政治が悪ければ政治を改める（根本的な政治改革としての革命を起こす）、といった主張を展開しました。マルクスのこれまた初期の有名な文書が「共産党宣言」です。マルクス主義とは共産主義と同じ意味で、19世紀後半から20世紀前半まで世界中に広がりました。ソ連も主義としては、このマルクス主義を看板にしていました。

ロシア・ソ連においては、共産主義を掲げる政党が「ボルシェヴィキ」、「ボルシェヴィズム」でした。

第一次世界大戦のなかから、総力戦のなかで最もひどい状態に陥ったロシアで、「ボルシェヴィキ革命」が置きました。当時のロシアは、専制国家で、自由な民主主義的議会制度などなく、労働者や農民は自分たちの要求を国の政策に反映することができませんでした。それで、労働者の評議会（ソヴィエト）、農民の評議会（ソヴィエト）、更に兵士の評議会（ソヴィエト）を作り、戦争を続ける皇帝政府、皇帝追放後も戦争を続ける共和制政府に対して、平和とパンを求める「ボルシェヴィキ革命」（1917年11月、ロシア歴10月）を起こしました。その先頭に立ち、革命を率いたのがヴォルシェヴィキ（ロシア社会民主労働党の「多数派」という意味・・・ボリショイとは多数派の意味）のレーニンでした。

世界戦争・総力戦・そこから発生したロシア革命、その一年後のドイツの11月革命。こうした革命こそ、ヒトラー・ナチスがもっとも攻撃したものです。